



常識

■ 古川一夫

今から約 20 年前、米国の関連子会社に出向していた時のことである。当時の日本の通信機器メーカー各社は米国に新市場を求めてこぞって進出していた。光伝送機器や ATM 交換機がその新分野であった。ある大手通信キャリアから最新鋭のインタフェース装置の公募案件があり、世界の複数の有力メーカーが応札。熾烈な受注合戦の末、落札することができた。会社にとって個人としてもその分野での初めての受注で喜びもひとしおであった。

詳細な仕様打ち合わせを経て早速日本側で設計・製造にとりかかった。基本機能は日本仕様ベースの製品がすでに設計されていたので技術的には経験は十分で、あとは仕様書の日米の差を埋めるための設計をすればよかった。追加仕様部分の複雑な論理シミュレーションやアナログ特性の実験を行い設計を完了し、超特急で製造を行いすべての仕様の社内検査を合格、その新製品はお客様の研究所に空路で納入された。私をはじめ関係者は自信満々で、お客様での 1 週間にわたる受け入れ試験の結果が待ち遠しかった。

そして 1 週間後に合格証を受け取りに意気揚々とお客様の研究所に乗り込んだ。しかし待っていたのは無情にも「不合格」の結果であった。頭の中が真っ白になり、なぜ、なぜという思いで一杯になった。不合格の理由は「ある性能特性が満たされていないこと」とお客様の立会い検査官は冷静に言う。あわててその場でその特性項目を仕様書上で探した。しかしその項目は仕様書にはまったく記述されていなかった。ほっとするとともに同時に勝ち誇った気分では検査官にその旨を伝えた。しかし検査官はあきれたような顔をして「それは米国市

■ 古川一夫

独立行政法人 新エネルギー・産業技術
総合開発機構 理事長／情報処理学会
会長

1971年(株)日立製作所入社。2003
年同社執行役常務情報・通信グルー
プ長&CEO。2006年同社執行役社長。
2009年同社特別顧問。2011年独立行
政法人 新エネルギー・産業技術総合開
発機構理事長。2007～09年日本経団
連副会長。2011年より本会会長。



場では常識であり、そんなことはいちいち仕様書になんて書かないよ」と言われた。それは日本ではまったく問題にならない性能項目であった。

きわめて大きな落胆であったが気を取り直して、日本側に超特急で再設計・製造を依頼。3カ月後に新たな製品が米国に空輸され今度は合格することができた。

常識はあくまでその地域、その世界での常識であり普遍的なものではないということを改めて感じた。ちなみにウィキペディアによれば「常識は、社会の構成員が有していて当たり前のものである」としている価値観、知識、判断力のこと。社会によって常識は異なるため、ある社会の常識が他の社会の非常識となることも珍しくない。これは文化摩擦などとして表面化することもある」と書かれている。

情報処理技術もいわゆる ICT 分野にとどまらず、クラウドなどの新規技術を通じて適用分野はますます拡大しつつある。エネルギー、水などの社会インフラ分野や情報家電などのコンシューマ分野は言うに及ばず、今後もさらに新しい分野に適用されていくであろう。

この事件以降、未知の市場や異なった分野に挑戦する場合に、仕様作成段階においてまずはこの「常識の違い」を十二分に検討したかどうか、若いころのこの苦い思い出が常に私に囁いてくる。

